

菊と刀

THE CHRYSANTHEMUM AND THE SWORD



きく かたな 菊と刀

著者 ベネディクト
つのだ やすまさ
訳者 角田 安正

2008年10月20日 初版第1刷発行

発行者 駒井 稔
印刷 慶昌堂印刷
製本 関川製本

発行所 株式会社光文社
〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
電話 03 (5395) 8162 (編集部)
03 (5395) 8114 (販売部)
03 (5395) 8125 (業務部)
www.kobunsha.com

©Yasumasa Tsunoda 2008
落丁本・乱丁本は業務部へご連絡ください。お取り替えいたします。
ISBN978-4-334-75169-2 Printed in Japan

図本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。



を全面的に受け入れる覚悟がないのであれば、批判は差し控えなければならない。画家志望の少年、牧野義雄に対するアメリカ人宣教師の嘲笑は、牧野少年の非難を呼び起した。そのような嘲笑は少年にとつて言語道断であった。善意にもとづいていたからである。将棋の盤面で一手指したら、それはどのような意味を持つであろうか。宣教師は、それをつぶさに先読みしようとはしなかつた。日本人の見方に従うなら、それは、まったく世慣れていないのと同じことである。

このように慎重と自重はいちじるしく重なっている。したがって、人は他人の行動に読み取れるあらゆる示唆を注意深く観察する。他方、周囲の人々によつて裁かれているという強烈な感覚にさいなまれる。日本人は言う。「世間の目があるから、自重に努める（自重しなければならない）」「世間というものがなければ、自重する必要はないのだが」。これらの言葉には、自重を促す外部の強制力が極端な形で示される。当を得た行動を呼び起こす内発的な強制力は、まったく念頭に置かれていなない。たしかに、右の言葉も事を誇張している。ちょうど、多くの国で見られる通俗的な言い方と同じように。なにしろ日本人は、人知れず積み重ねてきたおのれの罪に、清教徒^{キーリング}に劣らず強く反応することもあるのだから。しかし、それにもかかわらず、日

本人の用いる極端な表現は、日本において何が重視されているのかを正しく示している。それは、罪よりもむしろ恥の深刻さである。

異なるさまざまな文化を対象とする人類学の研究においては、二種類の文化を区別することが重要である。一方は、恥を強力な支えとしている文化。他方は、罪を強力な支えとしている文化である。ある社会は絶対的な倫理基準の刷り込みをおこない、人々が良心を發揮することに頼つて存立している。そのような社会は定義上、罪の文化ということになる。しかし、アメリカをはじめ罪の文化を基盤とする社会において、罪とは無関係な失態を気にするあまり恥ずかしさにさいなまれるということはある。たとえば、場違いな服装をして人前に出たり言葉につかえたりしたことを、あとでひどく気に病むというケースである。他方、わたしたちなら罪悪感の原因になるはずだと予想する行為が、恥を主たる拘束力とする文化においては恥辱の原因になることがある。このような恥の感覚はひどく深刻なものになり得る。しかもそれは、罪悪の場合と異なつて、告白や贖罪^{レッカミ}をしたからといって和らぐものではない。罪を犯した者は、心を打ち明けることによって安らぎを得られる。わたしたちのこののような告白の仕組みは、カウンセリングにおいて用いられている。また、さまざまな教派がその違いを

超えて共通して用いている。わたしたちは、告白が安らぎをもたらすということを心得ている。ところが、恥が主たる拘束力となつてゐる場においては、おのれの過ちを打ち明けても心は休まらない。たとえ、告白の相手が懺悔聴聞司祭であつたとしても、逆に、不行跡が「世間の知るところ」とならない限り、心を悩ます必要はない。告白などしようものなら、また一つ余計に厄介なことが増えるだけのよつたな気持ちに駆られる。というわけで、たとえ相手が神であろうと、恥の文化には告白する習慣はない。あるのは、贖罪の儀式よりもむしろ、幸運を願う儀式である。

良いおこないを引き出そうとするとき、純然たる恥の文化は外部の強制力を頼る。

内面化された罪の意識を頼ることはない。その点で、純然たる罪の文化とは異なつてゐる。恥は周囲の人々の批判に対する反応である。人前で嘲笑されたり拒絶されたりするか、そうでなければ、嘲笑されたと思い込むことが恥の原因となる。いずれの場合も、恥は強力な強制力となる。しかしそれが作動するためには、見られていることが必要である。あるいは、少なくとも見られているという思い込みが必要である。罪の場合は違う。名譽という言葉が「自画像を裏切らないこと」を意味する国では、自分の悪事が露見していなくても罪の意識にさいなまれることがある。また、罪を告白することによって罪悪感が実際に軽くなることがある。

アメリカに移住してきた初期の清教徒は、罪悪感を自分たちの倫理全体の要石にしようとした。そのため、精神科医ならだれもが知つているとおり、現代のアメリカ人は良心の呵責かしゃくと折り合いをつけるのに苦労している。しかしアメリカでは、恥という足かせが重さを増していくのに苦労している。しかしアメリカでは、恥ではなくなつていて、アメリカではこれを倫理の衰えと解釈している。このような解釈には少なからぬ真理が含まれている。ただしそれは、わたしたちが恥というものに道徳の重責を負わせるつもりがないからである。わたしたちは、恥辱にともなう痛恨の念を道徳の基本体系に加えようとはしない。

ところが、日本人は加えている。模範的なおこないを指示する道しるべから逸脱したり、ある義務とほかの義務の均衡を保てなかつたり、あるいは不測の事態を事前に見越せなかつたりすることは、恥なのである。日本人に言わせれば、恥こそ美德の根源に他ならない。恥に対して敏感な人は、模範行動規定を一から十まで実行する。「恥を知る人」は「人格者」と訳されることもあるし、「信義を重んじる人」と訳されることがある。恥は、日本の倫理において権威ある場を占めている。ちょうど、西

本人の格式ばつた模範的行動の指針は通用しない。日本人は、大東亜に対する「善意の」使命を果たそうとして失敗した。彼らの多くは、中国人やフィリピン人が自分たちに向けてくる態度を知つていきどおりは、いたつて純粹なものであつた。

留学や仕事のためにアメリカにやつてくる個々の日本人の場合はどうか。彼らは國家主義的な心情に衝き動かされているわけではない。にもかかわらず、処世の領域ごとの色分けがきちんとされていない世界で生活しようとすると、自分の受けてきた周到な教育が「役に立たない」と痛感することが頻繁にあつた。自分たちの美德は輸出に堪えない。彼らはそう感じた。彼らが主張しようとしているのは、文化を兼容せることはだれにとつても難しいというような一般論ではない。言わんとしているのは、それ以上のことである。それは時として、次のような比較論に至ることもある。「自分たちがアメリカの生活に溶け込むのに苦労しているのに対し、知り合いになつた中国人やタイ人はあまり苦労をしていない」。日本人の自己分析はこうである。日本人特有の問題は、特殊な保身の仕方に頼るよう育てられているという点にある。日本人の保身は、他人の目に依存している。すなわち、規範を守つてることを微妙などこ

洋の倫理において、「心が潔白であること」や「神に対してもましさがないこと」、そして罪を避けることが権威ある場を占めているのと同じように。したがつて——これは当然の論理的帰結なのだが——人間は、あの世で罰せられることはない。古代インドの經典を知つていて僧侶を別とすれば、日本人は、この世の功德によつて来世が左されるという輪廻の思想とはまったく無縁である。また、キリスト教に帰依し、その教義に通じた人々を別とすれば、死後の報いであるとか、天国と地獄といったようなものは認めていない。

日本の生活においては、恥が最高の地位を占めている。恥を深刻に受け止めるあらゆる種族や民族について当てはまるのだが、恥が最高の場を占めているということはとりもなおさず、だれもが自分のおこないに対する世評を注視するということである。世間からどのような判定を下されるのか、それを思い描くだけでも、他人の判定が自分の行動の指針となる。だれもが同じルールでゲームをおこない、相互に支えあってるとき、日本人はくつろいだ気持ちになり、気安さを覚える。特に、「これは日本の『使命』を遂行するゲームだ」と感じるとゲームに熱が入る。日本人が弱点をさらけ出すのは、自分の美德を外国に輸出しようとかわだてるときである。外国では、日本